

第25回島根新生児研究会

日 時：令和3年2月7日（日）13:00～16:00

会 場：以下の各施設からのZOOMによるリモート中継形式

隠岐広域連合立隠岐病院、松江赤十字病院、

島根大学医学部付属病院、島根県立中央病院、

大田市立病院、浜田医療センター、益田赤十字病院

当 番
世話人：浜田医療センター小児科 齋藤 恒子

主 催：島根新生児研究会 協力：アッヴィ合同会社

1. B群レンサ球菌による遅発型感染症例への母乳栄養の適否

*松江赤十字病院小児科

藤脇 建久、森藤 佑次、加地 更紗
羽根田泰宏、堀江 昭好、長谷川有紀

同 感染症科

成相 昭吉*

B群レンサ球菌（GBS）による遅発型感染症（LOD）の2例を経験した。

症例1は日齢13に発熱と全身状態不良を認め入院となつた髄膜炎例。母体GBS監視培養は陰性。乳頭擦過検体及び母乳から、また会陰裂傷痕、膣、直腸それぞれの擦過検体からGBSが検出された。母乳を介して発症した可能性があること、母乳を介してLODやVLODが再発する危険性のあることを説明し母親は母乳栄養中止を選択した。GBSの血清型はIaであった。

症例2は日齢27に発熱を認め入院となつた菌血症例。母体GBS監視培養は陽性。母乳からGBSは検出されず母乳栄養を継続した。GBSの血清型はIIIであった。

GBSによるLODを発症した児への母乳栄養の適否について指針はない。各施設の取り組みについて伺いたい。

2. 当科で施行した新生児外科手術を振り返って—2020年の経験

島根大学医学部附属病院小児外科

久守 孝司、真子 純子、人見 浩介
船橋 功匡

同 消化器・総合外科

田島 義証

2020年に、当科で行った新生児外科手術は13手術（10人）で、圧倒的に多かった1年前の27手術と比べ半減はしたもの、例年と比べると少なくなかった。

市町村別内訳は、松江市5人、出雲市1人、大田市1人、江津市1人、県外2人で、松江市に偏っていた。疾患別内訳は、先天性横隔膜ヘルニア（ボホダレク孔ヘルニア）2例、先天性食道閉鎖症（グロスC型）2例、先天性回腸閉鎖症1例、腸回転異常症1例、低位鎖肛2例、胆道閉鎖症1例、その他2例、であった。全例に手術を施行し、術後経過は良好であった。

これとは別に、肺の低形成が著明で、手術に至らなかつた先天性横隔膜ヘルニアが1例あった。

昨年経験した新生児外科手術を振り返り、症例や疾患の解説を行う。

3. 離島である当院での出生状況の調査

隠岐広域連合立隠岐病院小児科

舛金 聖也

島根大学医学部附属病院小児科

森山あいさ

雲南市立病院小児科

樋口 強

大田市立病院小児科

堀 大介

【背景】当院は島で唯一の分娩取扱施設であるが、地理的不利や人手・医療機器の限界などの問題を抱えている。分娩取扱施設としての現状を把握するため、当院で出生した児の状況について集計した。

【方法】2017年1月から2020年12月までの4年間で当院で出生した児を対象に、在胎期間、出生体重、分娩様式、入院および治療内容を電子カルテから抽出した。

【結果】4年間の出生数は348例、在胎期間では正期産344例(98.9%)、早産3例(0.8%)、体重別では低出生体重児15例(4.3%)、巨大児2例(0.6%)、分娩様式では経産分娩288例(82.8%)、帝王切開のうち予定26例(7.5%)、緊急34例(9.7%)、入院が102例(29.3%)、呼吸補助・点滴を要した児が46例(13.2%)、本土への搬送が12例(3.4%)だった。

【考察】全国と比較し早産・低出生体重児が少なく、リスクを想定し母体を本土にトリアージできている効果が考えられた。

4. 「NICU・GCUにおける遠隔面会の取り組み紹介」

島根県立中央病院

新生児集中ケア認定看護師 遠藤 智弘

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、当院では面会禁止の措置が取られ、NICU/GCUにおいても面会制限を行っている。わが子がNICU/GCUに入院し母子分離となり、愛着形成を中心とした親子関係形成過程に特別な介入が必要となった家族にとって、子どもに会えない、触れられないといった状況は、今後の養育に影響を与えると考えられる。そこでNICU/GCUでは12月よりWEB通話・会議用アプリケーション「Zoom」を使用した遠隔面会を開始した。体験した家族からは「生まれてすぐ搬送になって心配していたが、起きている顔が見られて安心した。」といった感想が聞かれた。看護師からは、表情を見ながらの会話は、電話による声だけの時よりも親の思いを気遣うことができ、その後の関わりを持ちやすくなるといった感想が聞かれた。このことから、ICTによる遠隔面会は、愛着形成や看護師との

関係構築に良い影響をもたらすことが考えられる。

5. NICUにおける手指衛生の現状と極低出生体重児のMRSA発生率

島根県立中央病院

総合周産期医療センター(NICU/GCU)

前田 華可、嘉本 絵梨、鈴木 静

Hand Hygiene Challenge(以下、チャレンジ)により、手指衛生への意識の高まりを感じる。そこで、チャレンジ前後の手指衛生遵守率とMRSA検出率から今後の課題を検討した。

手指消毒剤使用量(1000患者日当たり平均)はチャレンジ前(2011~2014年度)28.3±17.9L、チャレンジ後(2015~2018年度)55.8±11.3L、石鹼使用量はチャレンジ前56.6±11.5L、チャレンジ後49.1±11.9Lであり、手指消毒剤、石鹼ともに前後で有意差があった。直接観察による年間粗遵守率は2016年度以降39.6%、59.2%、63.8%と年々上昇がみられ、一方MRSA検出率は2016年度以降34.6%、17.6%、17.4%と年々減少した。

チャレンジ参加を機に石鹼の使用から手指消毒剤使用にシフトしていることが分かった。今後は直接観察を効果的に行うなどの取り組みの検討に併せ、MRSA発生の関連要因にも目を向け、様々な角度からMRSA発生数の抑制に取り組んでいきたい。

6. 当院新生児室におけるスキンケアの取り組みについて

益田赤十字病院4階東病棟

大石 麻早、福原 孝子、平原 祥子

大庭 純子、新田 昌子、椋 良子

三浦 史子

幼児の皮膚の厚さは成人の2分の1程度で、皮膚の水分は奪われやすく、有害物質が侵入しやすい状態である。そのため皮膚のバリア機能を維持するケアが必要である。昨年度出生から1か月健診の間で、395名のうち140名の児に軟膏塗布が必要となるスキントラブルの発生があった。産後1か月の褥婦に対して行ったスキンケアに関するアンケートでは、94%がスキンケアに興味があると回答、ネットの情報でスキンケアを行っている意見が多くかった。また日々育児指導を行っているスタッフの意識調査をして、意図的に指導できていない現状があった。そこで、当院のスキンケアの方法や褥婦のニーズに合わせた指導方法が統一してできるように取り組みを行った。その結果、沐浴方法(アウトバスや保湿剤導入)やおむつ交換(ベビーオイルの使用)の指導方法の検討、またスタッフの意識改革・知識を深めることができたので取り

組みを報告する。

7. 搾母乳渡し間違い事故に対する再発防止に向けた取り組み

浜田医療センター 4階北病棟

村社 望, 原 幸子, 吉川 景子
塩川加緒理, 石本 泰子

新生児の療養生活に伴う医療事故報告では、栄養、清潔、運動に関するものがある。当院でも新生児に関連するインシデントは年間4件の発生があり、対象者が新生児ということから重大事故に繋がることもあり、全スタッフが事故防止対策を徹底することが重要である。

今年度当病棟において、搾母乳渡し間違いによるインシデントが発生した。看護師Aが予め温めておいた搾母乳を授乳室で待機する母親に渡すように看護師Bに

伝えたところ、誤ってBが別の母親に渡したという事例であった。そこで私たちは背後要因を明らかにするため、ImSAFERを用いて事例の経過を振り返り、分析を行い改善策について検討した。また既存の搾母乳取り扱い手順を修正し、継続的に改善策が実践できているか追跡調査を行った。その結果、ヒューマンエラーだけでなく環境要因にも着目した再発防止に向けた取り組みを継続的に確認することや看護師ひとり一人の確認行動への意識が高まる等の効果を得たので報告する。

【特別講演】

「新生児マススクリーニングの正しい採血方法と最近の話題」

島根大学医学部附属病院

小児科助教 小林 弘典 先生